

二〇一三年一月一日

団欒のカーテンに透く秋灯
一茎の野菊供花とす道祖神
いま抜いたばかりと大根持ちくれし
峠道下校の子らに暮早し
赫赫の淀の夕日に秋惜しむ

さつき
よし子
満天
よう子
菜々

二〇一三年一月三十一日

末枯の野にごと転ぶ力石
飛火野に鹿の影無く暮れ早し
広々と平城宮城芒原
リュック背にわれも俳諧秋遍路

雅流
ひかり
よし子
なつき

二〇一三年一月三〇日

ほつほつと点るは谷戸の秋灯
宿場町訪ね巡りて秋惜しむ
踏み石へ木犀屑をこぼしけり

よし子
満天
菜々

二〇一三年一月二十九日

トタン板太鼓叩きに木の実落つ
家族どち思ひおもひに秋灯下
京なれや大路小路に菊香る
黄落や六百年の大公孫樹

ぼんこ
きづな
満天
あさこ

二〇一三年一月二十八日

錦秋の嶺に白きは天文台
もぐ柿に日のぬくもりののこりをり
伏し眼なる観音像に秋深む
枯蟪蛄構えし鎌に力なし

こすもす
雅流
つくし
よう子

二〇一三年一月二十七日

山粧ふへアピンカーブ曲がるたび
禅寺の結界殊に紅葉燃ゆ

ぼんこ
あさこ

二〇一三年一月二十六日

さし石と文字刻まれて露の石
黄落の樹下を離れて画架立つる
朝戸繰るたびに金木犀匂ふ
ただ無為に過ごす秋思のベンチかな

ぼんこ
さつき
満天
なつき

毎日句会みのる選・二〇一三年一月四日